

R・スツエレスツェウスキー著

# 『ガーナ経済の構造変化』

R. Szereszewski, *Structural Changes in the Economy of Ghana 1891~1911*, Weidenfeld and Nicolson, 1965, 150 p.

本書の著者 Szereszewski は、1961年より4年間、P. T. Bauer 教授の指導のもとに、London School of Economics において研究生活を送ったポーランド生まれの若き経済学徒である。著者がどのような理由から、ガーナ経済の研究に関心を持つに至ったかは必ずしも明らかではないが、『西アフリカ貿易』(West African Trade)の研究で著名な Bauer 教授の助言が動機となったことは十分考えられる。したがって、本書の論述においても Bauer 教授の影響が強く現われている。

まず、本書の構成は次の7章よりなる。

第1章 序文、第2章 1891年の経済構造、第3章 1901年の経済構造、第4章 1911年の経済構造、第5章 経済の成長過程、第6章 1960年との比較、第7章 結論。

最初に、著者が1891年から1911年に至る20年間について、ゴールド・コースト経済の構造変化はきわめて著しいものがあったとして、次のように指摘する。すなわち、著者によれば、経済的資源とは、(1)天然資源、(2)人的資源、(3)人的資源に付随すべき技術等に分類することができるが、本書の目的は、ゴールド・コースト経済の発展可能性を上記3種の資源利用の点から明らかにすることである。そして、当該経済において土地はかなり豊富であったこと、さらに農作物の種類も多く、いわゆる天然資源は豊かであった。しかし、このように恵まれた自然条件がある場合でも未利用の労働力と旺盛な商業精神(trading spirit)とがなければ、その経済発展の可能性を十分発揮することはできない。そこで、商業精神はさておき、いわゆる未利用の労働力について、著者はきわめて強い関心を示しながら以下の論述にはいる。

まず、ココア農業が導入される以前の1890年代においては、労働することよりも遊休することに対してより高い選好を持っていたので、当時のゴールド・コーストにおける未熟練労働力の供給は、きわめて不足した状態であった。その結果、未熟練労働力はリベリアから、熟練労働力はヨーロッパから供給されることになった。

次に、1891年から1911年におけるGDPの成長率を算

出すれば、年率7.6%、1人当たりとしては年率6.5%というきわめて高い成長率を経験したが、これはあくまでもココアを中心とする輸出の拡大により達成された。そして、この高い輸出成長は、1891年にはわずか10万時間にすぎなかった労働力投入量が、1911年には実に3700万時間へと、ゴールド・コーストのココア農業に対する労働力投入量は激増したのであった。すなわち、この20年間における当該経済の成長パターンは「労働力吸収的」(labour-absorptive)であった。

しかし、この時期での人口増加率は1%前後と、それほど著しいものでなく、上述のココア農業に対する労働力投入量の激増は、1人当たり労働時間の増大によってのみ可能であった。ところが、この場合でも、すでに述べたような労働か遊休かの選好によって労働力の投入は規定されていたのである。

そこで、このような選好について、生産単位としての農家はどのような行動基準を持っていたのであろうか？

ここで、次のようなモデルを作成する。

$$(1) P_1 = f_1(L_1),$$

$$P_1 = \text{伝統的消費財}, L_1 = \text{労働}$$

$$(2) P_2 = f_2(L_2, \alpha, \beta),$$

$$P_2 = \text{輸入消費財}, L_2 = \text{労働}$$

$$\alpha = P_2 \text{の生産技術}, \beta = \text{交易条件}$$

つまり、農家の welfare function はつぎの三つの変数を含んでいる。すなわち、(1)労働投入、(2) $P_1$ を入手するレベル、(3) $P_2$ を入手するレベル。そこで、

$$(3) W = \phi(L, P_1, P_2)$$

という関数を得る。すなわち、生産物の限界効用と作業労働の限界非効用とによって、当該農家はその労働力をどの程度まで投入すべきかを決定する。そこで、輸入品消費の増加、つまり輸出品の生産増加は、コンスタントに保たれてきた伝統的消費財への労働投入の限界効用を押し上げるひとつの要因となっているが、その場合、新規に良い条件での投入機会が開かれていても、伝統的消費財の生産に向けられる労働投入量は一定であったのである。

つまり、1891~1911年のゴールド・コースト経済の特質は、(1)農業部門での著しい労働集約性、(2)非農業部門で必要な未熟練労働の欠乏、(3)熟練労働の供給がある程度水準にあったこと、にある。このような状態があったため、その後における当該国経済の活動パターンは労働非集約的となり、他方、人口増加とともに労働供給は増加した。そのような労働非集約化傾向は、たとえばコ

コア農業においては、病虫害防除によって生産性を高める方向に進んだように、農業・非農業を問わずに行なわれた。

この結果、農村における労働需要の大宗としてのコア農業の地位は、相対的にも絶対的にも後退した。すなわち、産業構造における資本化 (capitalization) が進展したのである。

すなわち、(1) 資本ストックの比率を見れば 1911 年は cocoa 29%, construction 53%, equipment 18% であったが、1960 年には、おのおの 22, 60, 18% と変化した。また (2) 資本係数を算出すれば、1911 年の 0.8 から 1960 年には 1.8 となっている。つまり当該経済は資本集約度 (capital-intensity) を高めてきたのであり、これはたとえば、伝統的消費財の生産活動を初めとする分野での活動が相対的に縮小したことを意味している。さらに (3) 資本構成をみれば、1960 年のそれは 1911 年の実に 4.5 倍であった。換言すれば、上記の資本化により労働力供給の不足 (labour-scarcity) を解決する方向へ進んだのである。

そこで結論的に言えば、ゴールド・コースト経済は (1) 天然資源と人口の比率で恵まれていたこと、および (2) 利用可能な労働力の利用度が低位であったことによって特徴づけられていたのであり、労働力の投入は「所得 (income)/遊休 (leisure)」選好の強度によって決定された状態であった。

しかし、ココア農業の導入は労働力投入の選好を遊休よりも所得へと転換させ、その結果、いわゆる未利用労働力の活用を促進した。この場合、Basel Mission に代表される教会布教団の手で「技能教育」や「ココア種子の改良・普及」が行なわれたこと、あるいは外国商社により国際市場への道が開かれたことなどが、原住民の (1) 投資意欲、(2) 予見能力、(3) 技術導入などの企業者能力と結合して、その効果をいかに発揮してきたことは高く評価すべきである。

では、ゴールド・コーストにおけるこのような経済発展の体験は、他の低開発国についてはどの程度まであてはまるのであろうか？

多くの低開発国、なかんずくアフリカ諸国においては、天然資源/人口比率はめぐまれた状況にあり、さらに労働力投入はゴールド・コースト経済にも見られた「選好均衡」 (preference equilibrium) により支配されていると想定される。したがって、ここで必要なことは、労働力投入が遊休に対してよりも所得に対して強く規定されるという選好基準を転換させることであり、その結果、

いっそう多くの労働力が遊休から解放されて生産活動に利用 (投入) される。そして、豊富な天然資源に十分適応しうるのである。

そこで、一般的に指摘されるような、伝統的均衡 (traditional equilibrium) にある低開発国経済に固有な不動性 (immobilisme) についてひとつの示唆を与えることができる。すなわち、低開発国経済をしてその物理的に利用可能な資源を活用せしめるために、先にみたような諸条件を与えれば、先進諸国の特権であると考えられているような高い成長率を達成することが期待されよう。

これまでの説明により、本書において著者が述べんとしたところは、ほぼ伝えることができたと思うが、結論的に言えば、天然資源に対して人口希薄な (たとえばアフリカ諸国のような) 低開発国について、その経済成長のひとつのパターンを明示した点で、本書は高く評価されねばならない。そして、著者自身も指摘しているように、低開発国をしてその物理的に利用可能な諸資源を活用せしめるための「条件」を与えるならば、先進諸国の場合と近似した高度の成長率を達成することは期待できよう。しかるに、著者の論点はあくまでも 19 世紀末にココア農業が初めて導入された時点における成長過程の分析に置かれており、その時期に達成された高度の成長率が、その後も継続的に維持されうるか否かについては必ずしも明らかでない。その意味から、ゴールド・コーストにおける経済発展の initial impacts の分析ではあっても、いわゆる sustained growth の理論ではない。特に、ココアが生産されれば売れるという「セーの法則」を前提としたかのように、輸出市場の問題分析が見られないことは、1960 年の経済構造との比較を扱ったものとしては大きな欠陥があると言わねばならない。

いずれにせよ、農村の豊富な余剰労働力を動員して、ココアという輸出 1 次製品の生産拡大が可能であったという著者の指摘は、H・ミントも述べているように「余剰労働力は人口過剰国についての概念であった」点からみて、まさにユニークなアプローチであったと言えよう。ただ、これをもって低開発国の経済開発の一般理論とすることは、上記の理由からみて明らかな限界がある。

ともあれ、当該国にココア農業が導入されたことが、それまで維持されてきた農村の伝統的均衡状態を打破ることとなった点を明解に指摘したことは、著者の精緻な分析によるところが大きく、高く評価すべきである。

(調査研究部アフリカ調査室 細見真也)